

「現地を訪問して想うこと」 B 宮城県コース参加

98年 経営学部卒業 吉岡 宗昭

私が今回参加させていただいた目的は2つありました。

ひとつめの目的は、震災から1年半以上たち、被災地以外の人々の記憶が風化してくるなか、実際に現地を訪れることで、何が自分たちにできるのか、また何を必要とされているのか知ることでした。

また現地の方と直接のやりとりをすることで、メディアを通じてではない、「ナマの姿」を知ること大きな目的のひとつとして捉えています。

今回特に南三陸町を訪問して思ったこと、そして現地の校友の方々との交流のなかで感じたことを中心に記載いたします。

① 南三陸町の海岸側の風景



まず南三陸町にはいって思わず息をのんだのが、見渡す限り原野になってしまった海岸側の風景でした。建物の基礎部分ばかり残っていますが、そのほかは草しか生えていなくそのほかは流された橋や建物がまさに当時のまま残っており、震災後、時間がとまってしまったような現状がそこにはあり、なんとも表現できない気持ちになりました。

② 南三陸町防災庁舎



次に 普段メディアでよく目にしていた 3F建の防災庁舎にもいきました。

たくさんの方が手向けられ、また数多くの観光客も訪れ手をあわせていました。

しかしながら、この建物を残すことに地元でも賛否両論があると伺いました。震災を風化させない、ということを目的として残す、というのも一理ありますし、一方で見るたびにたつらくなるので壊してほしい、という方がいるもの事実です。

これは「いい・悪い」の話ではないと、地元の方とのやりとりの中で強烈に痛感しました。

被災地以外の方の記憶が風化しても、実際に被災された方の悲しみはずっと続いているというのも、改めて自分の肌で実感しました。

また、1日目の夜、松島で校友の方々と話す機会もあったのですが、国の支援が必ずしも有効に機能していない現状も知りました。

例えば、工場をつくと、その75%補助金で支援をしてくれる制度があるのですが、そもそも製造機能だけ強化しても、継続的な販路を確保しなければ、在庫の山になりまた雇用もできないという実態があります。

しかしながら、国や県からは矢の催促で「補助金を用意したので使ってほしい」という圧力がかかる。国や県としては、「予算を使うこと＝支援をしていること」になるので予算の消化が目的となり、予算を使って何をつくりその後どう展開していくか、という未来図までは描いていない。

その現状に、官と民との強烈なギャップを感じました。

結果的に「補助金を活用」することが、目的になってしまっているのが、資本主義社会のなかで、震災がなければ淘汰されていたかもしれない企業も含めて工場を乱立する結果となり、過当競争を招き、健全な企業までが共倒れする結果になってしまうのではないかと、そういったことを危惧されている方もいらっしゃいました。

また工場をつくって人員を募集しても、被災者には毎月国から補助金がでており、(あと1年延期とのこと)働くとその補助金が減らされる、もしくは全額なくなるため、人も集まりにくいという事実も聞きました。

いずれも普段はあまり実感することのない、まがいない「現実」でした。

そんな状況の中でも、未来へ希望をもって復興への足跡を一步一步踏み出している人に多く会えたのです。

復興の肝になるのは「公」の力や「金」ではなく「人」だと改めて実感、人の力の大きさと偉大さを感じました。

### 1人ひとりの力は「微力かもしれないが無力ではない」「1人ひとりの力があわさると大きな力になる」

私自身これから何ができるかわかりませんが、復興のために、そして日本全体の元気のために「もっともっとできることはある」という気持ちを新たにして帰路につきました。

「がんばろう！日本！がんばろう東北！」

被災地意外では、東日本大震災の記憶も風化してきていますが、これを読んで少しでも被災地に思いをむけていただける方がいらっしゃれば、こんなにうれしいことはありません。

今回参加させていただいて本当にありがとうございました。

以上